

私の一冊

こども学科 松浦 崇 先生

杉山春 著 『児童虐待から考える 社会は家族に何を強いてきたか』

小鹿図書館 367.3/Su49

全国の児童相談所における、児童虐待相談対応件数は、平成 29(2017)年度には 13 万件を超えました。多くの皆さんは、そうした児童虐待のニュースに触れるたびに、子どものことを思って心を痛め、同時に、そうした行いをする保護者等に対して、「なぜ、そんなひどいことができるのか」「子どもを傷つけるなんて許せない!」と、怒りに似た感情を抱いていることと思います。

本書の著者である杉山春氏は、フリーのルポライターとして、大阪市西区で、シングルのお母さんが 3 歳と 1 歳になる姉弟を 50 日間マンションの一室に放置して餓死させた事件(『ルポ虐待 大阪二児置き去り死事件』ちくま新書)など、多くの児童虐待問題取材してこられた方です。「鬼のような親」と捉えられがちな親や家族が、なぜそのような行為に至ったのか、どのような窮状に置かれていたのかを丁寧に取材することで、加害者側の抱えていた困難や考え方(規範意識)の一端を明らかにしています。

本書でも、神奈川県厚木市のアパートの一室で、当時 5 歳で亡くなった子どもの遺体が 7 年間にもわたり放置された後、白骨化した状態で発見された事件などについて詳しく分析されています。そして、虐待する親の多くが「孤立」を抱えると同時に、過剰な「生真面目さ」をもつが故に、子育ては親が完璧にこなすべきという「規範」に縛られることで、助けを求めることが難しい状況に置かれていると指摘しています。

「共通するのは、自分自身の苦しさやつらさを感じ、そこから主体的に助けを求めるのではなく、社会の規範に過剰なまでに身を沿わそうとして、力尽きてしまう痛ましい姿だ。」(p.86)

「子育て支援」が盛んに叫ばれていますが、今の社会は、本当に、子どもに、そして子育てをする家族に優しい社会になっているのでしょうか。「児童虐待をなくそう!」と言いながら、近くに子どもを保護するための児童相談所が設立されようとする、一転して激しい反対が起きるのはなぜでしょうか。そうした問題を検討する上で、多くの示唆を与えてくれる良書です。

本書は、今の社会における家族規範(家族・親はこうあるべき、という考え)の変遷を追うことで、児童虐待問題の本質を追究しようとしています。こうした視点は、これから短大で学びを深める皆さんにとっても、多くの気づきを与えてくれると思います。一読すると、児童虐待はもちろ

んのこと、さまざまなニュース・事件・出来事を見る視点が、きっと変わるはずです。